

読書の四季

神保町探訪記

通例では先生の書評が載る一面だが、今年度最後はネタを求めて図書委員が旅に出た。今回は二面も使って神保町へ行った報告等にお付き合い頂きたいと思う。

一月十八日(金)の放課後、高等科図書主任の飯島先生、中等科図書主任の南場先生、司書の竹内さん、高等科二年の徳留、一年の倉本、中等科三年の高見澤、顧問、二年の佐藤の計八名が飯島先生に案内役をお願いして「世界一の古書店街」として有名な神保町へ行った。

ひとまずこのページでは私たちがどこへ行ったのかを私の自己満足で作った地図と写真を添えて書いていく。

JR御茶ノ水駅に降りた後、神保町のもう一つの顔、楽器街と学生街を抜け、最初の目的地、東京古書会館の古書展へ。そこで古書マニアたちの空気を肌で感じた後は古書店へ向かった。

学習院高等科
図書委員会

会報
No.106

発行
2013.3.22



御茶ノ水駅



お茶の水橋



明治大学

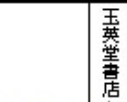


東京古書会館

明大通り



大屋書房



玉英堂書店



小宮山書店



一誠堂書店



神保町駅

靖国通り



私たちが訪ねた時には雪でできた招き猫もあった。

神保町古書店マップ(私たちの行ったところ ver.)

大屋書房、玉英堂書店、小宮山書店、一誠堂書店へと転々。これらの書店にも、また先ほどの古書展にも中には十万円を軽く超すような貴重書等の芸術作品が多くあった。

そのため、「ご自由に、お手に取ってお読みください」と棚には書いてあったものの一瞬ふれる事さえもはばかられ、結局表紙を見ただけ、という委員もいた。

そつえば後のページにあるが当図書室で昨年末開催された文化フオーラムのテーマは電子書籍がもたらす変化であった。もし、本⇨電子書籍になれば、古書はどうなるのだろうか。

私は古書には紙のまま残ってほしいと思う。紙だからこそ感じる歴史の重さもあるからだ。最後は少し話がそれてしまった。次のページではそれぞれの書店を詳しく、古書の持つ歴史の重さを感じていただるように書いていく。

世界一の 古書店街へ!!

~ 神保町探訪記 part2 ~



一面に続いて二面も神保町についで記事にお付き合ひ頂きたい。そして二面は私たちの行ったところ、つまり東京古書会館、大屋書房、玉英堂書店、小宮山書店、一誠堂書店それぞれについて箇条書きのような形で書いていく。

東京古書会館

最初に飯島先生が案内してくださったところ。毎週金・土曜日に

は古書展が開かれている、飯島先生曰く『古書マニアの聖地』。飯島先生も開店前に並んでお目当ての古書を手に入れていらっしやっただ頃があっただらう。

私たちが行ったのは金曜日の十六時過ぎ。階段を降り、飯島先生が外から見るだけにしようとおっしゃったのを華麗にスルーした南場先生が、カウンターに荷物を預けて中に入ってしまった。他のメンバーが苦笑しながら着いていくと、たくさん古書とそれらを求める『マニア』たちからの熱気とで、今まで感じたことのないような何とも形容しがたい空気になっていた。

大屋書房

マニアと南場先生のすごさ(?)を感じた後は飯島先生のマメ知識(古書店が北側を向いているのは本に直射日光が当たらないようにするため等々)を聞きながら古書店街へ。

まず入ったのが大屋書房。ここは江戸時代の和本や古地図、浮世絵、版画の専門店。滝沢馬琴の南総里見八犬伝や、歌川広重の東海道五十三次など歴史の授業で出てくるような物がかなりのお値段で

置いてあった。

玉英堂書店

いきなりハイレベルなものを見せつけられた後、私たちはさらにレベルの高いものを見に行く。百年以上の歴史を持つという玉英堂書店だ。フクロウの置物がたくさん置かれた階段を二階へと上るとそこは初版本や限定本などがきれいに並べられている。どのようなものがあったのかは当図書室にあるパンフレットを見てほしい。

小宮山書店

大きな衝撃を受けた玉英堂書店を後にし、次に私たちが向かったのは小宮山書店。昨年の鳳櫻祭で展示した三島由紀夫の作品の多くはここで買われた。二階の窓からアトムが見え少しは気が楽になった。中に入ると写真や絵画などの美術関係が多いイメージ。よく見るとかなり高価な品ばかりだった。四階はショールームとなっていて、三島関係の書籍がずらりと並んでいた。

一誠堂書店

最後に私たちが訪れたのがここ、一誠堂書店。外国語の本が多く並び、これまでの古書店でも少しはいた外国の方々がたくさんいた。

もちろん日本の本もあり、巻物、和本など大抵のものはそろっていったように思える。

最後に

二面にわたってお読み頂いた『神保町探訪記』もそろそろ終わり。一面の最後にも触れたが、やはり本から歴史を感じるには無表情な電子書籍よりも、日焼けして変色し、独特なおいを発する紙の本のほうが良いと思う。

またまた話がずれてしまった。最後に感想を少しだけ。

私自身初めての一・二面の担当。読書の四季を読むなんてありえない、という方でも少なくとも一面は目に入るページ。どうしようか考えた結果自作の地図を貼るというアイデアが浮かんだ。新しい風を入れることができたかもしれない。来年度には編集部長になる。もつと新しい風を入れていけるよう精進していきたい。最後までお付き合ひ頂き、ありがとうございました。

倉本 健太郎



今当図書室で展示している和本も飯島先生が神保町で買われた物だ。

文化フォーラム報告

今年度は文化フォーラムが二回開催された。四・五面はこれら二つの報告をする。

平成二十四年度

第一回文化フォーラム

『これからの「読書」を考える』

『電子書籍がもたらす変化』

場所 学習院中等科図書室

日時 二〇一二年十二月十五日

一年 和泉 孝紀

当図書委員会では昨年、十二月十五日に、毎年恒例の文化フォーラムを本校図書室にて開催した。

参加校は、海城高等学校、県立浦和高等学校、県立浦和高等学校、成城学園高等学校（五十音順）であった。参加校の図書委員を七つのグループに分け、それぞれのグループで話し合いを行った。

今回のテーマは、

『これからの「読書」を考える』

『電子書籍がもたらす変化』

電子書籍と「紙の本」の将来について話し合った。

では、各班で出された意見をいくつか挙げておく。

一・電子書籍の利点と欠点

利点

- ・ 軽くてかさばらない
- ・ デジタルデータなので管理が楽。
- ・ 語句検索などができる。

紙を使用しないからエコ。

欠点

- ・ 整理がしやすい。
- ・ 販売サイトなどで購入する際、口コミなどにより偏った感情を抱いてしまう。
- ・ 出版社が倒産したり機械が破損したりしてしまつたら見られなくなってしまう。
- ・ 目が疲れやすい。
- ・ 立ち読みできない。
- ・ ネット環境や端末が必要。
- ・ 海賊版が横行する危険性がある。
- ・ 気軽に貸し借りができない。

籍がそこまで広く浸透していないことが原因であろうと思われる。

二・紙媒体の利点と欠点

利点

- ・ 売りたい本に帯をつけたり、店頭でポップをつけたりできる。
- ・ 書き込みができる。
- ・ 付録などの特典を付けることが可能。
- ・ 中身を見て購入することができる。

欠点

- ・ 電子書籍に比べ、スペースをとるため持ち運びや整理がやりにくい。

などと、電子書籍に比べ利点が多いように思われる。

三・電子書籍のストアの多様化

電子書籍が普及していくにつれて、最近ストアの量も増えていつている。しかし、ファイル形式がそれぞれで違うなど問題点が多い。結論を言うと、ファイル形式を統一することがやはり必要である。

これは、そのストアの運営会社がつぶれてしまったときに購入した本が読めなくなってしまうということを防ぐためであることに加え、ストアによって本の価値を変えな

いたためでもある。また、ストアの

多様化については書店と同じ現象なので防ぎようがなく、好みによって変わる。ただ、比較サイトがあつてもいいのではないかという意見も挙げられた。

四・勉強と電子書籍

電子書籍の教科書や事典、参考書などが増えている中でそれぞれの利点などを話し合った。まず、教科書や参考書においては勉強している感覚がなくなってしまうことが挙げられた。また、忘れ物をした場合など、手元にないと何もできなくなることも問題である。しかし、資料集や事典に関して言えば、重さとスペースにおいて確実に利便性は電子書籍のほうが良いだろう。また、情報の伝達スピードという面でも電子書籍のほうが上手だ。それぞれ利点と欠点があり、共存することは間違いないというような結論は出なかった。

このような議論が各班で展開された。結論を言うと、やはり電子書籍と紙媒体は共存していく、という意見が多かった。

本校で開かれた文化フォーラムの報告をこれで終わりたいと思う。私は今回が初めての文化フォーラムだったが、普段会話をした



ことのない委員と話し合うことで、新たな視点を持つことができた。大変な貴重な体験であったと実感している。議論というものは、結論を求めるものである。そこでもう一度自分自身で最終的に判断することも大切だ。形の上では各班結論を出しているが、微妙な部分を残しており考えさせられた。それが私は非常に好ましいものであったと感じている。また、議題以外で好みの本などの話でも盛り上がった班が多くあり、本を通して他校の委員との交流ができ、改めて本の偉大さを感じさせられた。このような機会があればまた参加したいと私は思っている。

平成二十四年度

第二回文化フォーラム

『世界に誇る日本の文化』

場所 埼玉県立浦和高等学校

日時 二〇一三年一月二六日

二年 櫻井 貴弘

我々は埼玉県立浦和高等学校で開催された文化フォーラムに参加してきた。文化フォーラムとは、他校の生徒との交流の場のことである。

我が校からは図書委員八人が参加。全七校総勢四十人ほどが六班に分かれ、議題に沿った話し合いが進められた。話し合いは事前に用意されたレジュメをもとに進められ、二時間ほど続いた。

レジュメにはアニメ、ゲーム、食文化、音楽、文学が紹介されていた。各班活発に議論し、盛り上がった班ではそれぞれのジャンルに詳しい人たちが熱弁をふるっているのが見受けられた。

「どんなアニメを見ますか?」
「や」どんな音楽を聴きますか?」
といったような問い掛けから話を膨らませていった班が多かったらしく、所々で「それ面白いですよ」等、共感の声があがっていた。少し早いが最後に。

話し合い中はただただ圧倒されるばかりで感想を言い表すことができない。

ただ一つ、何か書くとすれば最近の流行や文化に深く触れることができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。

幹事校の埼玉県立浦和高等学校さん、その他参加された方々、ありがとうございました。

